

牧師室から(2023.3.12)

明後日土曜日11日で、東日本大震災が起こってから12年となる。寒くひもじく、そして慌ただしかった非日常の、怒涛のように過ぎ去った震災直後の日々を思い起こしている。

当時、属していた教会のお隣の奥さんが、妹さんを津波で亡くし涙をこらえていたのが忘れられない。その奥さんも既に脳腫瘍で亡くなっている。十年一昔とは言うが、月日が経つのが速く、人も大分変わったのを実感している。

何のいわれもない人たちが命を落とし、また動物や植物も生命を失っている。

以前、ある論壇で、並木浩一先生が「巻き添え」ということを少しお話されたことがある。つまりヨブ記についてみれば、神からの試練によってヨブに与えられた災難は、その子らや家畜の命までも奪う。まさに子どもたちや家畜は巻き添えを食らったのである。そのような不条理の死についてはどのように報われるのであろうか。

あの震災を通して様々な観点から考えさせられた。多くの人たちの考察を知り、自分なりに思考の旅をしてきた。そのようにして12年が過ぎようとしている。愛する人を失った方々の悲しみが癒されていくのには、時間が良い効薬ではないかと思っている。これも悲しみ多いこの世を生きている私たち人間に与えられている神様の恵みであるのに違いない。

(鈴木淳一牧師)